虚実の物語

雪宮春夏

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

十代目ボンゴレファミリーとその関係者達が「十年後」の未来の世界から帰って数日が過ぎていたある日の夜。並盛中央病院に一人の少女が運び込まれた。

その少女の名は笹川京子。そして、発見当時、彼女の体をすっぽりと覆っていたのは「Ｉ世のマント（マンテッロ・ボンゴレ・プリーモ）」……ボンゴレ十代目である沢田綱吉が所持していたはずの、匣（ボックス）兵器だった。

同日、重霊地、空座町にて、浦原喜助は一人の倒れた少年を拾う。

「このままじゃ目覚めが悪いでしょう？……それに、ここで何があったかも、気になりま

すしね？」

意味深に笑う浦原だったが、その拾い物が何なのか、それはまだ彼も知らなかったのだった。

目次

序章　はじまりの日
壱　1
弐　11
参　18
四　27

序章　はじまりの日

壱

その知らせを聞いたとき、沸き上がってきたこの感情の名を、この時の僕はまだ知らなかった。

「リボーンさん！」

「小僧っ！」

血相を変えて駆け寄った山本武と獄寺隼人に、彼らのボスであるボンゴレ十代目、沢田綱吉の家庭教師を務める黄色のおしゃぶりを持つ晴れのアルコバレーノ、リボーンは、短く苦言をもらした。

「静かにしやがれ。……まだ手術中なんだぞ」

リボーンが、目を向けたのは、会話に入らなかったこの場にいる最後の一人。「手術中」の掲示が点灯するのを睨むように見つめる、獄寺、山本と同様に沢田綱吉の守護者に名を連ねる銀髪の少年、笹川了平だ。

現在手術を受けているのは、彼の妹、笹川京子である。

「……執刀医はシャマルだ。あいつは性格には難があるが、腕の方は確かだぞ」

手術中の妹に対して、何も出来ない自らの無力を悔いるかのように、了平の拳は固く握りしめられていた。
気遣いの意味も込めた言葉だったが、今の彼には気休めにもならないのだろう。
説明を求める山本、獄寺に、無力さに沈む了平をそれぞれ眺めて、帽子で顔を隠したまま、手ぶりで場所を移すことをリボーンは、提案した。
「小僧……話してくれ。一体ツナに何が起こったのな?」
重い沈黙の中、ようやく口を開いた初めの人物は山本武。沢田綱吉の雨の守護者だ。
それに同意を示すように、同じく彼の嵐の守護者である獄寺隼人も、鋭い視線でリボーンを見つめる。
夜間照明で薄暗いこの場所は、面会時間外なのも重なり、彼らしか人影は無い……筈だった。
「その話。僕も聞かせてもらおうか」
廊下の向こうから響いた声。おそらくついたばかりなのだろう彼に、リボーンはいつもと変わらぬ不敵な笑みを浮かべた。
「良く迅速に動いてくれたな……礼を言うぞ。ヒバリ」
「構わないよ、赤ん坊。……これは僕の並盛で起きたことだ」
素っ気ない言葉でリボーンをあしらうのは、並盛中学風紀委員会委員長にして、「並盛

の秩序」……そして、雲の守護者とされている雲雀恭弥だ。
　ボンゴレ十代目である綱吉にはここにいない、雷、霧を含めて、計六人の守護者がいるが、一人はその幼さから、もう一人は拠点としている黒曜町が並盛からだと距離があるという理由で、まだこの話は伝わっていないだろう。
「まぁ、事情を説明するっていったところで、ボンゴレの方でもまだ大半が調査中だ」
　……だから分かっていることだけを、簡潔に纏めるぞ。
　そう続けたリボーンが取り出した指輪に、獄寺と山本は息をのんだ。
「小僧っ、それ……!!」
「十代目、の……!!」
　リボーンが取り出した指輪は、沢田綱吉が所持している筈の動物型匣兵器（アニマル・ボックス）「大空ライオン（レオネ・ディ・チェーリ）」のナッツが内蔵されているもの……アニマルリングである。
「京子がここに搬送された時はまだ炎は残ってたがな。流石に今は尽きちまっている」
　リングに目を向けたまま、言葉をもらさない彼らに、リボーンも目を合わせることなく、続けた。
「京子が保護された現場はかなり荒らされていた。あそこで何らかの戦いが起きたことは疑いようもない。今は詳しい情報が出てこねぇかボンゴレの諜報部の奴らが捜査に入っている。その結果待ちだな。京子自身の怪我は足に一カ所。その経口の小ささか

ら銃弾じゃねぇかと思われるが、弾丸らしきものはどこにも見つかってねぇ。他にはそれらしい怪我は無い。それは頭からすっぽりと一世(マンテッロ・ボンゴレ・プリーモ)のマントを被っていた効果だろうな」

それはナッツが、防御形態の武器となった時の姿だ。

「ってことは、十代目は……！」

そこまでの会話で何かに気づいたのか、獄寺の声は震えていた。

「そこにいた……ってことか？」

同じように動揺を隠せない山本にも、リボーンは黙って頷いた。相棒のナッツがそこにいたことから綱吉もその場にいただろうと考えることは当然の帰結と言える。しかし、事態が発覚してから綱吉は目撃情報も無ければ、本人からの連絡も無い。その現実が今の考えられる事態の予測を悪くしている。

ナッツのような匣(ボックス)兵器を発動させるためには、マフィア界に伝わる「死ぬ気の炎」を使えなくてはならない。

それと対で使うリング自体、現代ではまだ兵器としての認知度は低く、使い方も沢田綱吉の兄弟子であるディーノのような先見の明を持たなければ、知る由もない。

例外としては、他ならぬ綱吉達が数日前まで巻き込まれていた現代よりも十年先の未来の世界での戦いに関わり、そこで命を落としたその時代の大空のアルコバレーノ、ユ

ニから記憶を受け取った、この時代の面々だけだろうが、その中でも綱吉と同じ大空の炎の属性を持つものはごく僅かだ。その僅かな別人がナッツを出したと言うよりも、持ち主である綱吉が出したと考えるのが、今のところは妥当だろう。

「だけど……ボンゴレリングも沢田綱吉も未だに見つかってない。……そうだよね？」

問いかけよりも確認に重きを置いた雲雀の言葉に、リボーンの口元が僅かに歪む。

「この一日の間に並盛に出入りした人間を調べている。……敵対ファミリーによる拉致も視野に入れてな」

「……!!」

次々と聞かされる言葉に、山本と獄寺の顔色は悪い。

守護者とボス以前に同い年で、友人でもある彼らだからこそ、余計に衝撃は大きいのだろう。

並盛の住人が傷つけられた時点で並盛の秩序を称する雲雀の心中も穏やかではない。

「悪ぃが、これ以上の情報は、憶測やら伝聞が入り混じっているせいで、正確とはほど遠いもんなんだ。……流石のボンゴレも、混乱状態でな」

苦笑を浮かべつつも三人に背を向け、リボーンは一人、夜の並盛へと姿を消した。

同時刻、並盛町から遠く離れたある町の外れを二人の男が歩いていた。

「この辺りっすねぇ。虚霊（メノス・グランデ）の放つ虚閃（セロ）並の、高エネルギー反応があったのは」

呟いたのは短い金髪の男。緑と白の縦縞の帽子を目深く被り、その表情は窺えないが、手元には小型の機械が握られていた。

「しかし店長。反応があったのは一度だけ。しかもごく僅か。その上、現在は如何なる反応もしめされません。店長がいらっしゃっても、ただの無駄足で終わる可能性があります」

そう男に語りかけるのは、彼の背後に従うように歩く大男だ。髭面に眼鏡のいでだちがどこか危険な雰囲気を感じさせるが、後頭部で揺れる中華風のおさげが、それを中和しているように見えなくも無い。

「無駄足結構ってもんです！　こんな面白そうな事象が起きているのに手を出さないなんて、科学者の名折れになりますよぉ!?　テッサイさん。知的好奇心と探究心を失ったら、人は退化しかしないんすから!!」

扇子で自らを扇ぎながら笑う彼は、好奇心旺盛な子どものようだ。

「いえ……私は店長と違い、科学者ではありませんが」

あくまで律儀に答えようとするテッサイを無視して、男……店長は、その場所に目をやった。

「ここのよう……っすねぇ」

それは、直径数十メートルはあろうかと思えるほどの巨大なクレーターだった。
日がある内に人が見れば、隕石が落ちたとでも、勘違いしそうである。
「円状のクレーターとは……虚閃で、できるものではありませんな」
己の考察を述べながらも周囲を警戒しながら眼鏡を光らせるテッサイに頷いて、店長もクレーターの淵から内側……クレーターで出来た窪みの中を覗き込んだ。
「しかし店長……もしこの地で何らかの戦いがあったのだとしても、このクレーターだけでは……むっ!?」
キラリと、テッサイの眼鏡が光る。
店長と呼ばれた男もそれを視界に収め、知らず知らずのうちに目を細め、笑った。
「何スカね……あれ」
彼が指し示したのはクレーターの最深部分。一段くぼんだ場所に、遠目からでは見落としそうな影があった。
チラリと、店長が走らせた視線でテッサイも察したのか、彼が先導する形で、両者、クレーターの抉れた地面を滑り落ちる。そのまま周囲を警戒しつつ、身構えながら進むテッサイと、散歩のような軽い歩調で、近付く彼。
もしここに第三者がいたら、何とも対照的な二人だと言われたことだろう。
「……おや?」

その存在がはっきりと視認できる位置まで来た店長が思わず漏らしたのは疑問を含んだ一言だった。

「これは……人間、ですかな？」

次に口を開いたテッサイの声音には、呆けたような、気落ちしたような色があった。

「えぇ。……子どもみたいっすねぇ」

改めて目を向けた店長が頷いた通り、そこにいたのは満身創痍と呼べる体で、仰向けに倒れている人間の子供だった。

ボサボサの、逆立った茶髪。元は明るい青色であったのだろうパーカーは、点々と血がこびりついており、おそらく碌な手当はされていない様に見える。その上、子どもの耳からズレたヘッドホンには、歪な罅が入っており、両手に付けている手袋もボロボロだった。それがどのような証言よりも雄弁に、この子供が受けた物理的な衝撃を物語っている。

それを裏付ける様に、子どもの意識は無く、呼吸も虫の息と言うものだった。

「……取りあえず、このままじゃ死んじゃいますねぇ……。助けますか！」

何の躊躇いも、迷いもなく言い切った男に、流石にテッサイも反論しようと口を開く。

後ろ暗くない人間なら、見るからに重症、下手をすれば重体かもしれない虫の息の子供を放って帰ることは出来ないだろう。

しかし、テッサイは己が、己と共にいるこの店主が、場所によってはかなり後ろ暗い人物であると分かっていた。

発見した切欠を考えれば、あの場所の関係者が絡む可能性は途轍もなく高い。そうでなくても日陰者な身の上である以上、正体不明な第三者の救助などテッサイは推奨出来ない。

それを十分に理解しているはずの男は、手にしている扇子でテッサイを制し、微笑んでみせた。

「このままじゃ目覚めが悪いでしょう？　……それに、ここで何があったかも、気になりますしね？」

子どもに目を向ける店主の浮かべた表情には、悲しみや憂いは無く、あるのはまるで新しい玩具を手にしたような純粋な笑み。

その姿に、結局のところ、彼を動かすのは安っぽい正義感でも無ければ使命感や義務では無く……知的好奇心と探究心。この二つに尽きるのだと再確認する。

「分かりました。店長」

おそらく、助かったとしても彼には碌な未来は待ってはいまい。そう心の中で確信しながら、表面上は、平静を装うテッサイは、荷物を持ち上げるかのような姿勢で子どもの体を抱き上げた。

「さて！　帰りますか……」

飄々と呟く男はカランコロンと下駄を鳴らしながら、帰路につく。

彼の名は浦原（うらはら）　喜助（きすけ）。

都会の町、空座（からくら）町にある、しがない駄菓子屋の店主である。

弐

手術中。その明かりが消えた途端、笹川了平はがばっと、音が立つ勢いで立ち上がっていた。

作動音と共に開かれた手術室の自動扉から聞こえるカラカラと担架を推し進める音に、了平は堪えることも出来ずに叫ぶ。

「京子ーっ！　極限に、無事かーっ!!」

「うるせぇぞ！　極限バカが!!」

「ぬおっ!?」

スパンと、音をたてて了平の頭を叩いたのは手術着を着込んだ一人の男だった。

「おおっ！　Ｄｒ．シャマル!!　京子は無事なのか!?」

叩かれた頭を抑えつつ、騒ぐその姿にシャマルは青筋を立てかける。手術の終わった直後の、しかも重傷者が出て来る予定の通路で騒ぐとは、この男はその重傷者が己の妹だと言うことを分かっているのだろうか。

執刀医でもあるシャマルは、少しでも術後の患者の負担を減らそうと負担の原因となりそうな男の襟首を掴み、その場から遠ざけようとする。

「おい！　何をするのだ!?」
構わず騒ぎ続ける了平に、苦労して平静を保ちつつ、人気のない場所まで連れ出した。
「うるせぇ！　少しは静かにしやがれ!!」
声を殺して叱りつけると、一応周りの迷惑という言葉は知っていたのか、了平は慌てて己の口を両手で覆う。
ほとんど手遅れなそれに溜息を零しつつ、シャマルは言い聞かせるように言葉を続けた。
「少しは言動にも注意しろ。……ここのスタッフは一般人ばかりだぞ？　通行の邪魔はするわ、喧しいわ」
最後の二つは完全にシャマルの愚痴だったが、了平は己の非と納得したのだろう。頻りに頷いている。その姿を見ながら、シャマルは再び溜息を吐き出した。
平静を保とうとはしているが、かくいうシャマルの内心も、決して穏やかではない。
知らせを受けてここまで連れて来られてからこちら、ずっと生きた心地はしていなかった。
「それで……極限に京子は無事なのか!?　シャマル!!」
そんなこちらの心情などまるで頓着せずに己の疑問を晴らそうとする喧しい男に、遂にシャマルも忍耐が切れた。

「だから喧しいって言ってんだろ?!　無事も何も元から命に関わるもんじゃねぇよ!!」
彼……シャマルは、裏の世界では「トライデント・シャマル」と呼ばれる殺し屋であり、その能力「トライデント・モスキート」によって、何人もの人間を殺してきた闇医者である。自ら「男は診ない」と豪語する、医者としては一癖も二癖もある人物ではあるが、潜ってきた修羅場と腕は確かな物だ。
そんな彼が、今回無償でこのような事をやっている理由は、彼がボンゴレ十代目ファミリーの一人、獄寺隼人と知古の間柄であるからだ。
ある時期に獄寺隼人の実家であるマフィアに仕えていた縁もあり、獄寺の戦闘方法における、実質的な教師役を担った事もあるほどである。
「傷は足に一カ所。初見では銃創に見えたが、どうやらあれは刃物……おそらく槍の穂先か何かだろう。足の甲から入って貫通してやがるが、幸いにも神経系には傷はついてねぇ。完治には時間はかかるだろうか、歩く分にも後遺症は出ねぇだろう。今は麻酔も効いてるし、よく眠ってるよ」
総括してシャマルは煙草に火を灯した。
原則として病院内は禁煙の筈だが、生憎とそれを注意できる人間はここにはいない。
「そうか。それは良かった……」
本来ならば注意をしなければならない唯一の同席者である彼も、現在は最愛の妹の事

で一杯一杯なのだから仕方がない。

（こっちはもう問題は無い……だが、向こうはどうなった？）

そんな同席者に対して、シャマルはしかし、彼ほど楽観的にはいられなかった。

こちらの問題……笹川京子を守っていたアニマルリングの所有者、沢田綱吉。

リボーンの教え子で、獄寺隼人が忠誠を誓ったボンゴレ十代目。

彼も、彼が持っている筈のボンゴレボスの証となる大空のボンゴレリングも、未だ見つかっていない。

しかし状況下から、笹川京子が負傷したとき、彼が傍にいた事は間違いないだろう。

（イタリアならともかく、今の日本は一般人には武器の所持は禁じられている。その上、比較的手に入りやすい銃で無く、刀となると、更にその流通は少ないはずだ）

そうなれば当然、流行ルートも限られる。その購入者を裏の人間……とりわけ、もしこれが、ボンゴレと敵対するファミリーによるものと仮定すれば、そろそろボンゴレの諜報部が何らかの情報を掴んでも良いはずなのだが。

（無事で居るんだろうなぁ……！おいっ……！！）

常のシャマルであるならば、己の愛する女でも無い、沢田綱吉のことはここまで気にする事は無い。

しかし今は、便りが無いことが良い証拠とはどうしても思えなかった。

「極限に、心配はいらないぞ。Ｄｒ．シャマル」
シャマルの中の不安を晴らすかのように、彼にしては珍しい、真摯な瞳で言い切ったのは、晴の守護者と呼ばれる程の性分か。
「沢田はどのような状況であっても、今まで生き延びてきた男だ。だから今回も、極限に心配はいらん」
にかっと快活な笑みを浮かべた男の強い瞳に、シャマルは思わず苦笑する。
「それ、理由になってねぇだろ」
言葉とは裏腹に、その口調には先程までの重苦しさは無かった。
「店長……何拾ってきたんだ？」
浦原喜助に問いかけたのは、浦原商店の従業員の一人、花刈ジン太である。
「何言っているんすか、ジン太君。見れば分かるでしょう？　いっておくけど、幽霊じゃあ無いっすよ？」
そう子どもを指さして答える喜助だが、「拾ってきた」の部分は否定していない。
喜助と会話する彼は、二人が帰ってきた音を聞きつけて、慌てて起きてきただけなのか、パジャマがわりの甚平は所々しわになっていた。
「……って、何だよそいつ!?　ひどい怪我してるじゃねぇか!!」
指し示した姿を確認した事で、ようやく子どもの状態に気づいたジン太は声を上げ

る。

「言われなくても分かってますよぉ。今から手当てするんです。さぁ、退いた退いた」

狼狽えるジン太に平然と答えて、浦原は商品の並んだ売り場のスペースを抜け、一段上がった先にある居住空間。その境目とも言える座敷の、更に奥へ続く障子を開ける。

「ジン太君。そこに布団一組しいて置いて下さい。あたしはちょっくら奥で準備をしてきます」

「へっ？　ちょっと何で俺だよっ!!」

意味深な浦原の発言に、一瞬呆けた直後、軽い調子で押しつけられた雑用に思わず不満を訴えるが、言って早々奥に引っ込んだ彼には勿論聞こえるはずもなく、更に追い討ちをかけるように、入り口の付近に立ち止まったままの子どもを背負ったテッサイから声が上がる。

「ジン太殿！　お早くっ！」

「ああっ！……もうっ、分かったってのっ!!」

開け放したままの障子の向こうで繰り広げられている騒ぎを耳だけで捕らえながら、浦原はこの出来すぎている偶然に眉をひそめた。

「……人の医者じゃ治せないであろう傷……そんなものをこさえた子どもを、よりにもよってあたし等が拾おうとは」

切欠は、浦原が観測した高エネルギー。そこに倒れていたボロボロのあの子どもは、それを受けてああなったのか、否か。

そう出ないにしても、霊圧で生じた怪我は、人間の医療では治せないのだから、ここに拾われなければ死ぬのは時間の問題だったことは容易に想像できる。

「一見して服についている血痕は多くありませんが、こういう怪我はそれよりも恐ろしい所がありますからねぇ」

ふぅと、零した吐息は何を含んでいるのか、それは浦原にもよくは分からなかった。

参

空が白み始める頃になって、リボーンは重い足取りで、居候先の沢田家に戻ってきた。
「お帰りなさい。リボーン」
扉を開閉する音に気づいたのか、今から出てきたのはリボーンの三番目の愛人にして、同じく沢田家の居候、ビアンキ。
その目は、発した言葉以上に、多くの事を訴えていた。不安から眠ることも出来なかったのか、目の下には薄らと隈が出来てきている。
「……すまねえ。ビアンキ」
しかしそんな彼女にかけることの出来る言葉を、リボーンはこれ以外持ち合わせていなかった。
沢田綱吉が行方知れずとなり、笹川京子が発見されてから、既に六時間以上が経っている。
雲雀恭弥率いる風紀委員会も、ボンゴレファミリーの諜報部も血眼になって並盛中を探しているが、彼の行方はようとしてしれない。
ここまで来れば、ボンゴレファミリーの関係者としては、最悪の事態も視野に入れて

動く必要性が出てくるだろう。
即ち、ボンゴレ最後の後継者、沢田綱吉の死の可能性を。
「ママンの、様子はどうだ?」
最悪の事態から目を逸らそうとするように、話題を変えたリボーンに、ビアンキは瞳を揺らす。
「パパンと……沢田家光と連絡をとって、ようやく落ち着いたわ」
ママンとは、この家の女主人……沢田奈々の事だ。彼女が一人息子である沢田綱吉の失踪を知ったのは、今から五時間程前の事になる。彼女は自分の息子がイタリアンマフィアの中でも強大な組織、ボンゴレファミリーの十代目……次期ボスであることは勿論、彼女の夫であり、沢田綱吉の父親、沢田家光が、その組織の実質的な二番手である門外顧問機関の長であることも知らない。そのため、現場にいた笹川京子の状態等の詳しい事は教えていない。リボーン達と喧嘩して家を出してしまった。それ位にしか考えていないだろう。
既に死んでいるかもしれない等と、言える筈が無かった。
「俺の……責任だな」
ポツリと呟いたリボーンは、ボルサリーノで目元を隠した。
リボーンは、現ボンゴレファミリーのボス、ボンゴレⅨ(ノーノ)世の依頼で、沢田家を訪れ、沢

田綱吉をマフィアとするための教育を行ってきた。
近頃はその成果も現れ、自らの命を狙ってきた六道骸を倒し、ボンゴレの独立暗殺部隊、ヴァリアーのボスにして、ボンゴレⅨ世の義息ＸＡＮＸＵＳを下し、そして先日、雷の守護者であるランボの持つ兵器、十年バズーカーの応用によって連れて来られた「十年後の未来」の世界で、その世界を支配しようとしていた青年、白蘭を葬った。
それらの激戦を目の前で見続けていたリボーンは、不覚にも思い込んでいたのだ。
沢田綱吉は大丈夫だと。
少しばかり目を離したとしても、そう容易く倒れるような存在ではなくなったと。
まだ己がマフィアの十代目候補だと知って二年。まともな戦闘経験を積み始めて、まだ一年も過ぎていなかったのに。
（まだたった……半月前に十四になったばかりの子供だったのにな）
この時、リボーンの胸に過ぎた感情は悔恨だった。
家庭教師としての責任や殺し屋としての誇り。そんなものよりずっと大きく、リボーンは後悔していた。
沢田綱吉を救えなかったことを。
「すまねぇ……ツナ」
涙は一滴も出ることは無く、懐に入った彼のアニマルリングが、やけに重たかった。

「なぁ、獄寺」

夜が明けたばかりの並盛の町を、あてもなく歩いていた獄寺隼人は、同じように隣を歩く山本武からかけられた声に、チラリとだけ目線を向ける。

「……これからさ、どうなんのかな？」

主語の無い問いに、獄寺の眉間の皺が寄る。その様子に気づくこと無く、山本は只吐き出すように言葉を続けた。

「ツナは見つかんねぇし、犯人の手がかりもねぇ……小僧もずっと」

山本はそこで、最後に見たリボーンの姿を思い出した。

いつもの不敵な笑みが消えた、沈痛な表情。背を向けた小さな後ろ姿。

今まで様々な苦難を、綱吉と、仲間として乗り越えてきた。それは獄寺とて同じだろう。

そんな今までの戦いの中でも、山本は一度も、リボーンのあのような表情は見たことが無かった。

綱吉の傍らでいつも、山本を導いてくれた彼は、表情が読みにくく、ニヒルな笑みを浮かべて、常に余裕げに飄々としていた。

山本は無意識の内に、首にかけたままにしてある、「雨のボンゴレリング」を取り出す。

「未来」の戦いで初代ボンゴレ……ボンゴレI世(プリーモ)がボンゴレリングの枷を外したことで、リングはその姿を変え、「原型(オリジナル)」と呼ばれる形に戻った。

その時、山本は自分も初代の守護者達に認められたかのような、そんな感覚を覚えたのだ。

「……俺たち、ツナの為に何か出来たのかな」

誰に尋ねるでも無く、山本は只言葉を漏らす。元々、誰かに答えて欲しかった訳でも無い。

だからこそ、言葉が返ってきたのは予想外だった。

「何か出来たか、じゃねぇよ。野球バカが……!」

並んで歩いていたはずの獄寺が、いつの間にか止まっていた。

一歩、二歩と近づき、呆然としているこちらに構わず、襟首を持ち上げられる。

僅かに感じた息苦しさに息が零れるが…それを気にすることなく、獄寺は言い放った。

「野球バカの分際で！　グダグダクソ下らないこと、考えてんじゃねぇっ!!」

響いた怒声に、思わず目を丸くした。それに「馬鹿野郎が」と続け、獄寺は宣言する。

「十代目が行方不明になって……俺たちの周りがどうなるのかはまだ分からねぇ。けど……俺たちはどうすれば良いのか、それは俺の中ではとっくの昔に決まってる！」

常とはまるで別人のように静かな声音。
まっすぐに逸らされない瞳で、獄寺は山本を見据えた。
「俺は、十代目が戻ってくる事を信じている。だから、十代目が帰ってくる場所を、俺は守る」
迷いのない、覚悟の灯った目に、山本は頭を下げていた。
「悪かった……ごめんな。獄寺」
「何が出来たか」……過去として、沢田綱吉を見つめていた。
無意識に、その死を受け入れようとしていた。
そんな山本に、獄寺は気が付いた。
「……だからテメェは野球バカなんだよ。俺に言うことじゃねぇだろ!?」
容赦なく発せられる言葉の数々に、確かな暖かみがある。
「俺じゃなくて、十代目に言うことだ。……バカが」

並盛に隣接する町、黒曜。
その郊外にある、黒曜ヘルシーランドは、閉鎖されてから三年が過ぎている廃墟である。
そこには今、ボンゴレの保護下におかれている三人の子ども達が住処として暮らして

いる。

「クローム」

その中の一人、眼鏡に、頭の上に被ったニット帽がトレードマークと言える、おかっぱ頭の少年、柿本千種は、言葉少なめに同居する少女を呼んだ。ボンゴレ十代目、沢田綱吉の「霧の守護者」の一人……それが彼女クローム髑髏である。

彼女はもう一人の「霧の守護者」であり、彼ら三人が忠誠を誓う主人「六道 骸」の精神をその体に憑依させる事の出来る、特異体質を持っている。だからこそ、過去に彼女に起きた交通事故で、内臓を失って以来、骸の幻覚によって内臓を作られ、その生存権の一端を明け渡している。

そんな身の上だからこそ、依存心に近い形で彼を慕っており、髪型も彼と同じパイナ……いや、ひどく特徴的な南国果実を模していた。

軽く目を瞑っていた少女は千種の問いかけに首を振った。

「やっぱり……無理だった。ごめんなさい。骸様、ずっと反応がないの」

小さく呟いたクロームは、自身の無力さに恥じるように俯く。

千種はそんな様子に構うこともせず、いつの間にかズレていた眼鏡を軽く直している。

「そう。……困ったね」

「へっ！　肝心なときに役に立たねぇ女だなぁ！」
この場所にいた最後の一人、城島（じょうじま）　犬（けん）が苛立ちを抑える様子も無く言い放てば、目に見えて彼女は萎縮する。
「……犬。言い過ぎ」
淡々と千種が注意するものの、不満を良い足りないのか、これ見よがしな舌打ちと共にそっぽを向き、廃墟の出口へ向かっていく。
本来彼は、他者には喧嘩を売ることが多く、やり合う相手には容赦の欠片も持たない狂戦士の性質を持つが、その分仲間に対しての情は厚い。
しかし今はそれ以上に、連絡を取れなくなった六道骸の事を案じているのだろう。
彼ら三人を繋ぐのは、骸に対する感情である。
数千譲って牢獄に幽閉中であることは許せても、その彼と連絡が取れなくなることは許せないと言ったところか。
（……でも、骸様のこの感じ、似てる……）
溜息を着く千種を横目にしながらも、クロームは既視感を覚えていた。
数ヶ月前に起きた、ボンゴレリングを巡る、リング争奪戦。その最終戦であった大空戦の直前と、今で、骸の状態には、類似点があるように感じたのだ。
（まるで……他の人に話しかけているみたい）

昨夜、まだ日が昇らない未明に訪れたのだろう黄のアルコバレーノ、リボーンからの置き手紙で、クローム達三人は現在並盛にいるボンゴレ関係者が直面している事件の事情を知った。

緊急を要する事態で『霧の守護者』である筈の六道骸への伝達手段が置き手紙と言うのは、そのままリボーンの中にある彼らとの距離を表していた。

だが、それも仕方がないのだろう。

一度は沢田綱吉を狙ってきた過去を持ち、今も柿本千種、城島犬達の保護を条件に守護者となっている骸は、根本の部分ではまだリボーンに信用されていない。

最もこれに関して言えば、他ならない六道骸本人が、沢田綱吉その人に「信用するな」と言っているので、それも理由になるのかもしれないが。

結局その置き手紙では、こちらの要請があるまで待機と現状維持を命じられていたらしいが、それに反発したのがこの騒ぎの始まりだった。

彼らの目的はあくまで沢田綱吉の肉体を六道骸が使い、マフィアの世界に混乱を起こす事であり、その沢田綱吉がいない以上、ここに留まる事は彼らの利益にはならない。

そのため、事の報告も含めて、骸に指示を仰ごうとしていたのだ。

（骸様……一体、誰と話してるの？）

四

「デロ　ロクドウ　ムクロ」

抑揚の無い、くぐもった声。

それと同時に体を拘束されていた鎖を引かれ、無理矢理体を地面に引き摺られた。僅かにあげた呻き声は掠れ、音としても聞き取れない有様だった。力の入らない体を、意思の力で動かし、薄く瞼をこじ開ければ、そこには小枝のように細く、衰弱した己の体があった。

（…これは一体……どういう事だ？）

気を引き締めなければ再び途切れてしまいそうな意識を、何とか保ちながら六道骸は思考を巡らせる。

今から二ヶ月前、ボンゴレ十代目候補である沢田綱吉の肉体を手に入れるために、収容されていた監獄を脱獄した。その際に他の囚人と看守を皆殺しにしたこと。そして並盛でも、数十人の一般人を巻き込んだことにより、「マフィア界の番人」と呼ばれる復讐者（ヴィンディチェ）に連行されたのだ。

（……つい数週間前、そこから更に脱獄しようとした僕を、奴らは最下層の水牢に入れた

というのに、何故今そこから出されている？）

復讐者の思惑が分からず、自然と骸は自由にならない体を強ばらせた。

先日受け取った「十年後の未来」の記憶では、自分は十年間、水牢の中に捕らわれていた。ここまで短期間での解放など、ある筈がない。

（何か……誰かが糸を引いている？）

骸が思考を巡らせている間に、いつの間にか彼を引き摺っていた復讐者の動きが止まっていた。ガララと、微かな起動音と共に格子が上がり、その直後には、骸の肌を突き刺すかのような冷気が襲う。

しかし骸は、それ以上の驚愕と疑問に襲われていた。

復讐者と対峙する、己を解放した相手を目にしたせいで。

「どういう……ことです!?」

常に敵に対して浮かべていた、余裕の笑みは今は無い。隠しきれない動揺の中、一方で納得もした。

この男ならば、復讐者と取り引きをすることぐらいは出来る。それは他でもなく、未来の自分が証明しているのだ。彼の取り引きを利用して、この牢獄から出所したのだから。

「相変わらず冷たい仕打ちだねぇ？　薄着一枚なんて、骸君が風邪引いちゃうじゃんか」

そこに立つ男は、送る言葉とは裏腹に、満面の笑みで復讐者を迎えている。
「クフフ……何のつもりですか？　白蘭（びゃくらん）」
格子の降りた牢の外側、未だ拘束状態の骸に対してその男……「十年後の世界」で沢田綱吉に倒されたマーレリングの所有者は、ふふっと笑みを零した。
「ちょっと骸クンに、頼みたいことがあってね？」
これは沢田綱吉が失踪してから、僅か二時間後の出来事である。

「……店長」
テッサイの呼びかけに、手元の機器を弄くり回していた浦原が視線を向けた。
「やっぱり……ダメっすか」
浦原が目を向けたのは座敷に敷かれた一組の布団。その中に横たわる一人の少年に対してだった。
「体に関する傷の方は既に処置は完了致しました。しかし魂魄に欠損が……」
「やっぱりツスか……「最低値」には？」
冷静に分析するテッサイは、浦原の問いかけに首を横に振る。その二人の会話に割って入ったのは彼らの背後で様子を見ていたその少年の横たわる布団を敷いたジン太だった。

「な……なぁ、その「最低値」って、なんだよ?」
どうやら一度起き出していた手前、処置の間に眠りに戻るタイミングを失ってしまったのか、彼らの傍に残り続けていたのだ。
「うーん……最低値が何か、スか……」
袖元から愛用の扇子を抜き取り、徐に広げた浦原は、僅かに言い淀んでから続けた。
「まぁ、平たく言えば……」
最低値……それは、霊子体が観測されるに当たり、必要最低限の「霊子」数を指す。
「まぁ、その考え方自体、実践よりもお堅い理論重視のお役所仕事の人達しか使わないから、一般の死神には馴染みのない言葉なんだけど……」
そこで言葉を切った白蘭は、目の前にある袋から一つ、見慣れた甘味……マシュマロを取りだして口に含んだ。
「やっぱりキミも知らない側かな?……元死神の六道(ろくどう)骸(むくろ)くん」
白蘭の言葉に、ヒクリと口元を震わせたのは、彼の対面で目の前のコーヒーをにらみつけながら沈黙を保っていた本人である。
復讐者の牢獄から出所した彼は現在、日本東京都内にある最高級のとあるホテルの個室スイートに腰を落ち着かせていた。
外国のＶＩＰクラスも多く滞在する機会があるのか、常備されている備品も見事と

言って良い高級品が多い。
　しかしそれを使って日本のごくありふれたレトルトコーヒーを出されたせいか、自覚が出来るほど彼は微妙な表情をしていた。
「それはあなたが僕にこれから行おうとしている要求と、何か関係はあるのですか？　白蘭」
　一拍の間を挟んで問い返した骸の声にはその事実が知られて事に対する動揺と呼べるような変化はない。ただその場に流れる空気が張り詰めたのはここにいる全員が感じたことだ。
「要求なんて物々しいなぁ。僕はただ、「頼みたいことがある」って言っただけだよ？……気に入らなくて断ったとしても、僕は全然構わないのに」
　苦笑を浮かべながら新しいマシュマロを袋の中から取り出す白蘭に、骸は冷ややかな笑みで応じた。
「白々しいことだ。断った瞬間に、僕を殺す気だったのではありませんか？　そうでなければ、あなたの両脇を固める「真六弔花（リアル）」に説明がつきませんよ？」
　骸が示したのは白蘭の両脇に立つ青年二人。彼らに目を向けた白蘭も困ったように頬をかいた。
「手厳しいなぁ。骸くんは」

「上等じゃねぇか……だったら望み通りやってやろうか？　バァロォ……！」
笑って済ませた白蘭に対して、それでは我慢がならなかったのだろう。ゴキリと拳をならし笑ったのは、白蘭の右隣にいる赤毛の男、しかしその動きは、同じく左隣にいた色白の優男によって遮られた。
「落ち着きなさい。ザクロ。今ここで六道骸に貴方が手をあげれば、お困りになるのは白蘭様です」
薄く施された化粧により秀麗な顔を際立たせた彼は、女性と見紛わせるほどである。
「何せ彼は、現状の我々が手にできる、数少ない優秀な手駒なのですから」
男を宥める姿に、当の白蘭は何事かを呟きながら両手で顔を覆っている。
「……桔梗。それ言っちゃあダメだよ。さっきの骸クンの考えを肯定してるじゃん」
「おや……？　これは申し訳ありません。白蘭様」
「ハハッ。すかした態度のわりにはざまぁないなぁ？　バァロゥが」
桔梗の失言を笑ったザクロに微苦笑を滲ませた桔梗。しかしそこには嘗てのような張り詰めた味方をも威圧するような空気は無く、骸は不可解気に眉をしかめた。
「十年後の世界」でボンゴレファミリーを壊滅状態へと追い込んだミルフィオーレファミリー。
現在の彼らの関係性はまだ分からずとも、その頃の繋がりが全くないのならば彼らが

ここに同席している理由が分からなくなる。
先刻の言葉に否定も入らず話が続いている時点で現段階でも彼らは既に主戦力となり得る、マーレリングの「嵐」と「雲」の守護者であることは間違いないだろう。
「十年後の世界」では彼ら一人にたいして、こちらは四もしくは五人の戦力で拮抗した状態であっ
た。
（僕一人では、分が悪いですね）
しかし、果たして逃げ切れるのかと、彼らのやりとりを注視しつつも、冷静に状況を見定めようとしていた骸は、パンと袋を叩いた白蘭に視線を移した。
「まだるっこしいのは……そろそろお終いにしようか。……マシュマロも無くなっちゃったしね」
抑揚を抑えた声で、呟くとそのままに、袋をクシャリと潰した白蘭は、骸を見つめる。
「力を貸してくれないかな。六道骸クン」
その言葉と共に向けられた瞳は「十年後の世界」で何度も見た、感情の読めないものではなく。
「「ボンゴレの霧の守護者」としての君にだけじゃなく「死神」であった君の力もコミで」
不本意ながらも骸を倒した、あの少年とどこか似通った、意思の宿った瞳だった。

「「沢田綱吉」を、彼を救うために、力を貸してほしい」